

デベンドロナト・タゴール研究

竹内啓二

目次

はじめに

- | | |
|---|--|
| 1 デベンドロナトの思想形成 | 2) 知恵 (<i>prajña</i>) と知識 (<i>vidyā</i>) |
| 1) 宗教的めざめと真理探求 | 3) 因果律 |
| 2) 真知協会 (<i>Tattvabodhini Sabhā</i>)
の設立 | 4) 運命の正受 |
| 3) ブランモ協会への入会 | 5) 家族倫理 |
| 4) 宗教生活の深まり | 6) 仕事と道徳 |
| 5) ヴェーダ聖典の不過誤性の問題 | 7) 利己心の滅却 |
| 6) ブランモ協会の教えの基盤 | 8) 慈悲の実践 |
| 7) ブランモ協会の聖典の作成 | 9) 謙虚さ (<i>vinaya</i>) |
| 2 ブランモ協会の道徳律 | 10) ことばによる善行 |
| 1) ダルマ (<i>dharma</i>) | 11) 報恩 |
| | 結び |

はじめに

聖人研究はモラロジー研究の主要な課題の一つである。本稿では聖人に近

い人としてデベンドロナト・タゴール (Devendranath Tagore) をとりあげ、彼の思想について論じる。デベンドロナト・タゴールは、アジアではじめてノーベル文学賞を得た詩人ロビンドロナト・タゴールの父である。デベンドロナトの人格と思想はロビンドロナトに大きな影響を与えた。

デベンドロナトはベンガル語でモホリシ、すなわち大聖と呼ばれている。リシとは聖者という意味である。古くは紀元前1200年ごろにさかのぼれる、インド最古の文献ヴェダにしるされたことばを、神よりの天啓として伝えた聖者がリシと呼ばれた。デベンドロナトはまさに深遠なインドの精神的伝統の流れをくむ聖者であった。しかし、それと同時に西洋の思想も吸収し、社会改良家としての側面ももっていた。世間を離れた単なる隠遁者ではなかった。

本稿では、第1章でデベンドロナトの思想形成を彼の自伝に基づいて論じる。第2章では彼の作成した道徳律をモラロジーと対比しながら分析する。

1 デベンドロナトの思想形成

1) 宗教的めざめと真理探求

デベンドロナト・タゴールは、1817年5月15日に大企業家でラームモーハン・ローイの親友でもあったダルカナト・タゴール (Dwarkanath Tagore) の長男として生まれた。彼が18才の時、祖母が亡くなった。祖母の屍を燃やす火葬場 (ガート) に座りながら、富に対する強い嫌悪感を彼はいだいた。同時に、かつて感じたことのない喜びにふるえた。それは彼の宗教的精神のめざめであった。それまで、ぜいたくと快樂の生活につききっていた彼であった。

火葬場で味わった崇高な歓喜は長く続かなかった。数日後、彼がその喜びをとりもどそうとしても、とりもどせなかった。そして、彼の心は深い憂うつに閉ざされた。彼が何ものにも幸福と平安を見出ださないうちに、知識がなければすべては夜のように暗いということに突然気がついた。彼はサンスクリット語と英語を学びはじめ、インドの大叙事詩『マハー・バ

ーラタ』(*Mahā-bhārata*) を読んだ。また、西洋哲学の本も読んだ。そして、西洋哲学に彼が賛同できない二つの考え方を見出だした。彼は次のように述べている。「自然への隷属が人間の全存在を形づくっているのだろうか。…この怪物 [自然のこと] の力に抵抗することはできない。」自然の宣告に従うことが人間の究極の目的であるとするなら、そこには何の希望もない。また、西洋哲学によると「知識と呼ばれているのは、光線によって物の映像が写真の乾板に写るように、感覚器官によって外物が心に写ったものである。」⁽¹⁾

デベンドロナトはこのような西洋哲学の考えに満足できなかった。「無神論者にはそれで充分であろう。なぜなら無神論者は自然を超えたものは何も欲しないのであるから。」⁽²⁾と彼は述べている。

思索を重ねているうちに彼は次のような結論をえた。

……物質的世界の認識は感覚と色、音、香り、接触、味の対象とから生じる。しかし、この認識とともに私は自分が認識者であることを知ることができる。見ること、触れること、嗅ぐこと、思うことと同時に見、触れ、嗅ぎ、思うのが自分であることを私は知っている。……それ [全宇宙] は物質の計画したものではなく、それは精神の計画したものでなければならない。これは [この宇宙は] ある意識をもった実在者 (*cetānāvān puruṣa*) の力によって推進されている。……彼こそは我々の必要をことごとく知っていて、その秩序に全宇宙が従うところの神である。⁽³⁾

それゆえ、感覚器官によって外物が心に写ったものが知識であるという考え方は反ばくされた。デベンドロナトは我々が外物を認識するだけでなく、我々自身が認識者であることを理解したのである。

次に自然への隷属が人間の全存在を形づくっている、という考え方にも彼は反論した。彼によると、自然は確かに人間を支配しているが、それは支配者のいない機械的システムではない。すなわち、自然は意識をもった実在者である神に支配されている。それゆえ、自然もまた神の支配の下にあるのである。

この自然と人間を支配する超越的存在である神について、彼は次のように述べている。

彼〔神〕は無限の知恵である。彼より我々はこの有限な知識と肉体を得たのである。彼は形相をもたない。彼は肉体も感覚器官もない。彼はこの宇宙を手によって創造したのではない。ただその意志のみによってこの宇宙を創造したのである。⁽⁴⁾

このように神は形をもたないという立場に立ってデベンドロナトはラームモーハンの偶像崇拝否定に賛同したのである。幼年時代からラームモーハンの近くにいた彼は、ラームモーハンの後に従うべく偶像崇拝をやめようと努力した。それとともに、すべてのヒンドゥー教の聖典は偶像崇拝の教えに充たされていて、形なき神の真理を引き出すことはできない、という印象が彼の心に生じた。そのようなとき、偶然、彼は『イーシャ・ウパニシャド』の一節が書かれた本の1ページを拾った。それには次のような文が書かれていた。

(次のことを知れ。) この転変する世界の中で動いているこれらすべてのものは神によって包まれている。それゆえ、自制の中に喜びを見出だしなさい。他の者の所有物をほしがってはいけない。⁽⁵⁾

もし、我々が神が遍在していることを知るならば、物質欲をなくすことができよう。そして、利己心から自由になって、無執着心を得て、喜びの中に住むことができるであろう。デベンドロナトはこのように考えて、神への信仰の歓喜に満たされた。

2) 真知協会の設立

その後、彼は11の主要なウパニシャッドを読んだ。ウパニシャッドを熟読して、彼はそこに含まれている深遠な真理を広めたいという強い望みをもった。そして、そのために真知協会 (*Tattvabodhini Sabhā*) を1840年に設立した。

最初、10人しか会員はいなかったが、2年間のうちに500人となり、さら

に数年たつと、多くの裕福で影響力のある人々が真知協会に入会した。⁽⁶⁾1842年に真知協会の第1回記念祭が催された。その記念祭の講演でデベンドロナトは、「我々の聖典の要点は、神は形相なく、知恵そのものにして、普く遍在し、一切の思惟とことばを超越している、ということである。」と述べている。⁽⁷⁾もしウパニシャッドの真理が広く伝わったならば、英語の教育を受けたベンガルの知識人は他の宗教、とりわけキリスト教に魅力を感じなくなるだろう、と考えたのである。その当時、ヨーロッパ人のキリスト教宣教師たちは、ベンガルの知識人たちをキリスト教に改宗させようとしたのであった。⁽⁸⁾

デベンドロナトはウパニシャッドの内容に共鳴したが、ヴェーダーンタ哲学の教義を承認しなかった。その理由を彼は次のように述べている。

……シャンカラ師はブラフマンと一切の被造物との同一性を論証しようとしている。……もし、礼拝する者と礼拝されるものが同一であるならば、どうして礼拝が成り立つであろうか。⁽⁹⁾

彼の望んだのは神の礼拝であった。彼は偶像崇拝に反対したのと同じように、一元論にも反対であった。それゆえ、不二一元論を説くシャンカラを承認できなかった。また、シャンカラのウパニシャッドに対する注釈も完全に受け入れることができなかった。このような理由から、彼はウパニシャッドに自分で注釈をつけた。その注釈は礼拝者と礼拝されるものの関係を保つことに役立つようにつけられた。

3) ブランモ協会への入会

1842年にデベンドロナトはブランモ協会に入会した。1828年にラームモーハンによって設立されたブランモ協会は、1833年に彼がイギリスで亡くなると停滞期に入っていた。ラムチョンドロ・ヴィダバギシュ (*Rāmcandra Vidyābāgīś*) がその活動を細々と継承していたにすぎなかった。デベンドロナトはブランモ協会を改革し、真知協会を合併させる役割を担った。ブランモ協会はブラフマンの礼拝のために設立されたのであるから、真知協会と合併させれば、その目的はいっそう容易に達成されるであろうと彼は考えた。彼

は、1843年にオッコイクマール・ドット (Akṣaykumār Datta) を編集者として月刊誌『トットボディニ・ポトリカ』(Tattvabodhini Patrikā) を発刊した。『トットボディニ・ポトリカ』の目的は、真知協会の会員にその活動状況を知らせ、ラームモーハンの著作を普及し、会員の知性と品性を高めるような論稿を掲載することであった。⁶⁹

ブランモ協会への入会が適切に行なわれ、偶像崇拜にかわって唯一の最高神の礼拝が行なわれるように、デベンドロナトはブランモ協会への信仰告白書を起草した。その信仰告白書にはガーヤトリー・マントラ (Gāyatrī-mantra) によって日々の礼拝がなされるようにと述べられていた。これはラームモーハンの『ガーヤトリー・マントラによってブラフマンを礼拝する規定』(Gāyatrī Brahmapāsanāvidānam) より示唆を受けたものである。⁶⁹

ブランモ協会への入会式は1843年12月21日に行なわれた。その式でデベンドロナトと他に20人の人が信仰告白書を読みブランモ協会へ入会した。彼は次のように言っている。

かつてはブランモ協会が存在するだけであったが、今やブランモ法 (Brāhma dharma) が存在することになった。ブラフマン [最高神] なくしては法 (dharma) なく、法なくしてはブラフマンは獲得できない。法とブラフマンは永遠に結びついている。この結合を知ってブランモ法を受持したのである。⁶⁹

ここでデベンドロナトは法 (dharma) ということばを「生涯何らかの誓いを守り続けること」という意味で使っている。⁶⁹ また、ここで使われているブラフマンということばは、ヴェーダーンタ哲学で言ういかなる限定をも許さぬ無属性の存在を意味するのではなく、世界を創造し維持している主宰神 (Īśvara) を意味している。

1847年に真知協会の会合で、ブランモ協会の宗教の名称としてそれまで使われていた「ヴェーダーンタによって規定された真の宗教」(Vedāntapratipādyā Satya Dharma) に代わって「ブランモの宗教」(Brāhma Dharma) を使うことが決定された。⁶⁹ ブランモ (Brāhma) ということばはサンスクリ

ット語で多くのヒンドゥー教聖典に使われている。それは「ブラフマン、あるいは創造者、最高我に関連した」という意味である。ラームモーハンはこのことばを初めてベンガル語で「ブラフマンの礼拝者」という意味で使った。デベンドロナトがブランモ協会に入会してから、ブランモということばはブランモ協会の信仰告白書によって誓いを立てた人という意味で使われるようになった。⁶⁹

4) 宗教生活の深まり

入会の後、彼はブラフマンをガーヤトリー・マントラを唱えて礼拝しはじめた。しばらくして、ガーヤトリー・マントラの意味は一般の人々には理解するのが難しい、ということに気がついた。その結果、彼は二つの礼拝方式を作った。一つは個人的礼拝方式であり、もう一つは集団の礼拝方式であった。集団の礼拝方式として『マハーニルヴェーナ・タントラ』の第三章59-63の句を用いているのは注目すべきである。というのはラームモーハンもまた同じ句を彼の著した『ブラフマンの礼拝』(Brahmapāsanā) で使っているからである。しかし、ラームモーハンと異なり、デベンドロナトはその句の不二元論的な観念に基づくことばを二元論的の考えが表現できるように変えてしまっている。⁶⁹

ガーヤトリー・マントラによって日々の礼拝を行なっているうちに、彼は次のような確信を持つようになった。神は宇宙の支配者であるばかりでなく、デベンドロナト自身の魂の内に住み、つねに彼の思想と意志に靈感を与えているという確信であった。そして、次のように彼は述べている。

私は自分の性向と神の意志の間にある相違を理解しはじめた。自分の欲望が知らず知らずのうちに入りこんでいると思われるようなことは注意深く避けた。そして、私の良心によって神の命令だと思われることに従おうと試みた。⁶⁹

神の内在性を確信し、内なる神の声に従って自己の生活を送るようになってから、彼の宗教的精神は高まった。彼の心に、愛を通して神との永遠の交

流を獲得したいという祈りが生じた。そして、次第にその祈りはかなえられていった。彼は次のように述べている。

……神の慈愛の光はあたかも朝日のように私の心の中にさし込んできた
……私は愛の道の巡礼者になった。いまや、神は私の生命の中の生命であり、心の友であり、神なくしては一瞬も過ごすことのできないことを私は知るにいたった。

ブラフマンの認識とその礼拝体系をウパニシャッドの中に見出し、そして、ウパニシャッドの権威が全インドに認められていることを知ったデベンドロナトは、ウパニシャッドに基づいたブランモ協会の信仰を広めようと決心した。彼は次のような望みを表明している。

もし、ヴェーダーンタ [ウパニシャッド] に基づいたブランモ・ドルモ [ブランモ協会の教え] を説くことができれば、全インドは一つの宗教をもち、一切の紛争は終息し、すべての人は兄弟愛で結ばれ、往時のインドの精気と力が復活し、ついには自由を得るにいたるであろう。

デベンドロナトは、ヒンドゥー教の諸宗派をブランモ協会の教えによって統合しようとしたのであった。

5) ヴェーダ聖典の不過誤性の問題

1844年にデベンドロナトとアレクサンダー・ダフ (Alexander Duff) の率いるスコットランドの長老派教会 (Presbyterian Church) との間に論争がもちあがった。ダフはヴェーダ聖典の不過誤性を攻撃した。デベンドロナトの影響によって、『トットポディニ・ポトリカ』誌はダフの非難に反論する論稿をのせた。しかし、『トットポディニ・ポトリカ』誌の編集者であったオッコイクマール・ドットはヴェーダ聖典を不過誤の聖典とすることに賛同しなかった。そして、ブランモ協会の中でヴェーダ聖典の不過誤性について激しい論争が戦わされた。若い会員たちに支持されたドットは合理主義を信奉するグループをつくった。ドットの思想は理神論 (Deism) に近いものであった。しかし、デベンドロナトの思想は理神論とはかけ離れたものであっ

た。彼は言う、「我々の神との関係は礼拝者と礼拝されるものとの関係であり—これこそブランモ協会の教えの核心である。」⁶⁴ 彼が初めてウパニシャッドの中に神の思想を見出した時にも次のように述べている。

神を礼拝することによって、その結果として私は神を獲得する。神こそ礼拝するに値する。私は神の礼拝者である。神は私の主人であり、私は神の召し使いである。神は私の父であり、私は神の息子である。これは私の指導原理であった。⁶⁵

この指導原理は彼の生涯を貫くものであった。

デベンドロナトは四人のバラモン⁶⁶の若者をベナレスへ派遣し、ヴェーダ聖典の不過誤性の問題を研究させた。一方、ウパニシャッドの研究によってヴェーダ聖典における第二義の知識と第一義の知識の区別を知るようになった。リグ・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、ヤジュル・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダ、音声学、祭式の規定、文法学、語源学、韻律学と天文学は第二義の知識であり、至高存在に導いてくれる知識こそ第一義の知識である。彼自身が1847年にベナレスへ行き、ヴェーダの真の教えについて研究した。そして、第二義の知識の主題は神々に捧げるさまざまな儀式の規定であり、第一義の知識の主題は唯一の至高存在であるブラフマンであることを確信した。

第一義の知識はウパニシャッドに主として取り扱われている。デベンドロナトはウパニシャッドがヴェーダの神髄であると信じた。ウパニシャッドの文は神の啓示を直接に受けた古代の聖者たちのことばであると考えた。それゆえにウパニシャッドのことばは権威あるものであり、不過誤であると信じた。最初、彼は全部で11のウパニシャッドがあると思っていた。しかし、後に147のウパニシャッドがあることがわかった。ヒンドゥー教のヴィシュヌ派やシヴァ派は、ウパニシャッドという名をつけたそれぞれの宗派の神々の礼拝を説く聖典を広めていた。さらに、11の主要なウパニシャッドの中にも彼は次のような句を見つけた—「私は彼 [ブラフマン] である。」 (*Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad*, I, 4, 1) 「汝はそれ [ブラフマン] である。」 (*Chāndogya*

Upaniṣad, IV, 8, 7) これらの句には、真の自己と至高存在の同一性が述べられている。前述したように、デベンドロナトは礼拝者と礼拝されるものという二元論の基盤の上にブランモ協会の教えを確立しようと考えていたので、これらの句に見られる一元論的表現は彼を満足させなかった。

さらに、ウパニシャッドにおけるブラフマンの礼拝は涅槃 (nirvāṇa) に至るといふ思想に幻滅を感じた。例えば、『ムンダカ・ウパニシャッド』III, 2, 7の句「知識よりなる行為と自己はことごとく永遠なる至高存在に帰一する」とあるが、彼によると、「もし、これが感覚をもった魂がその独立した意識を失うことを意味するならば、これは救済の印ではなく、恐ろしい絶滅の印である。」彼の考えでは、魂は決して自己の独立した意識を失わない。救済の状態においては、永遠のブラフマンの庇護のもとに魂は安らぎを得るのである。救済の状態について、彼は次のように述べている。

そこでは新たなる生命に充ち、最高神の慈しみによって浄化され、魂は最高神の無限の知恵と愛と喜びに合一し、あたかも光と影のごとくにこれ自身も永遠に知恵と愛と喜びに住する。その瞬間は永遠に続く。このようにして、さまざまな点においてウパニシャッドに彼の思想との相違を見出したデベンドロナトは、ブランモ協会の教えの基盤をウパニシャッドに置くことができなくなった。

6) ブランモ協会の教えの基盤

結論として彼は「直感的知恵の光に充たされた清浄心」こそがブランモ協会の教えの基盤となる、と考えた。そして、その裏づけとして、次の二つのウパニシャッドの句をあげている。

瞑想によって一切の疑惑を離れ、一つの知恵に輝いた心の中に神は顕現する。(Śvetāśvatara Upaniṣad IV, 17)

知恵の光によって心が浄化される時のみ、人は瞑想によって部分をもたない最高神を見る。(Muṇḍaka Upaniṣad III, I, 8)

これと関連して、彼は次のように述べている。

彼ら [リグ・ヴェーダの聖者たち] は解脱を達成せんと純一な願いをもって苦行に励んだ。やがて、神々の中の神、最高神はこれらの道心堅固な清浄な心の中に自らを顕現し、一切の分別を超えた真理の光をばなした。

デベンドロナトによると、理性による思索や研究は知識を得るひとつの道であるが、瞑想によって直感的に知識を得るというもうひとつの道がある。最高の真理を得るためには後者の方法がすぐれていると彼は考えた。

それゆえ、ブランモ協会の教えの基盤もまた瞑想によって得られた直感的な知識に置く、という結論に到達したのである。そのような直感的知識に合致するウパニシャッドの文のみがブランモ協会の教えとして認められるというのである。

次に、すべてのブランモ協会の会員が共通に抛りどころとする信条が必要だと、彼は考えた。そして、ブランモ協会の信条を1848年に作成した。それは四箇条からなるものであった。第一条は、神が宇宙の創造者であることが述べられていた。第二条は、神が形相をもたず、不変で唯一であることなどが述べられた。第三条には、人々の福祉のために礼拝の必要なことが述べられた。第四条は、「神を愛し、神の望まれる仕事をなすことこそ神の礼拝である。」というものであった。

キティンドロナト・タゴールはデベンドロナトが第四の信条を作る時にラームモーハンの『ブラーフマ・ストトラ』III, 3, 53の句の解釈から影響を受けていることを指摘している。その解釈において、ラームモーハンは他人への愛を強調したのであった。ラームモーハンと同様、デベンドロナトも人類への奉仕と愛はブランモ協会の教えの核であると考えたのである。

7) ブランモ協会の聖典の作成

ブランモ協会の信条を作ってから、デベンドロナトはブランモ協会の聖典の必要を感じた。聖典作成の状況を次のように述べている。

それから、私は熱情をこめて神に心を開いた。神の恵みによって私の心

に開示された宗教的真理を私は読みなく、力をこめて述べはじめた。それはあたかもウパニシャッドの口からあふれ出る河の流れのようであった。

デベンドロナトのことはオッコイクマール・ドットが書きとめて、三時間でブランモ協会の聖典『ブランモ・ドルモ』(*Brāhma Dharma*)は完成した。

前述したように、それまで彼はウパニシャッドを何年にもわたって熟読していた。そして、ウパニシャッドの神髄について探究していた。さらに、瞑想によって何らかの真理を悟った場合にも、その真理をウパニシャッドのことばで表現しないと満足しなかった。次第にウパニシャッドの異なった部分を組み合わせて新しい句を作る試みをするようになった。『ブランモ・ドルモ』は彼のそのような努力の積み重ねの結実したものであった。一例を示せば、『ブランモ・ドルモ』XVI, 156に次のような句がある。

yaś cāyam asminn ākāśe tejomayo' mṛtamayaḥ puruṣaḥ [*Bṛhad.* II. 5. 10] sarvānubhūḥ, [*Bṛhad.* II. 5. 19]

yaś cāyam asminn ātmani tejomayo' mṛtamayaḥ puruṣaḥ [*Bṛhad.* II. 5. 14] sarvānubhūḥ, [*Bṛhad.* II. 5. 19]

tam eva viditvā atimṛtyum eti nānyaḥ panthā vidyate' yanāya. [*Śvet.* III. 8]

この句を作るために、デベンドロナトは『ブリハッド アーランニヤカ・ウパニシャッド』II. 5. 10の一部のことばと同ウパニシャッドのII. 5. 14の一部をつなげ、それぞれの句に「sarvānubhūḥ」という形容詞をつけ、最後に『シヴェターシュワタラ・ウパニシャッド』III. 8の一部を加えている。このようにして作られている『ブランモ・ドルモ』の句はひとつの統一を保っていて、合成されたもののように全く思えない。

デベンドロナトは『ブランモ・ドルモ』とウパニシャッドの関係を次のように説明している。

『ブランモ・ドルモ』はヴェーダとウパニシャッドに含まれている本質的

な真理によって形づくられ、そして私の心がそれを保証する。『ブランモ・ドルモ』は願いをかなえてくれるヴェーダの木の最上の枝に実った果実である。

デベンドロナトは、ブラフマンを知るためには宗教の示す道徳的法則に従うことによって心を清めなければならないと考えた。そこで『ブランモ・ドルモ』の第二部として道徳的律法を作成した。『マハー・バーラタ』、『バガヴァッド・ギーター』(*Bhagavad-gītā*)、『マヌ法典』(*Manu-smṛti*)を読み、それらから詩句を集めて道徳律を作った。これはヒンドゥー教改革派としてのブランモ協会の道徳律の成文化の最初の試みであった。そこにはオッコイクマール・ドット (1820-1886) の影響を見ることができる。

ドットは普遍性をもった宗教科学としてブランモ協会の教えを体系づけようという望みをもっていた。彼は自然の働きの中に神を知る必要があることを主張した。そして、宗教の違いを越えた普遍主義の立場に立って、倫理、道徳の重要性を強調した。宗教的心情は他の人のために善をなすことを促す道徳的教えとして普遍的に表現されていると彼は考えたのである。彼によると世俗を捨ててブランモ協会の信仰はない。世俗の中で神を信仰し、人々を愛し、善を実行することが神の欲するところである。社会の進歩のために必要なのは神が設定した宇宙を支配する道徳原理を発見することであり、人間はその道徳原理を政治、経済やその他の社会の側面に応用する必要がある。このような考えを彼の著書 *Dharma Niti* (『道徳哲学』) で表明している。道徳原理の社会への適用において最も重要なのは家庭に道徳を入れることであるとドットは考えた。デベンドロナトの作成した道徳律はこのようなドットの思想から影響を受けている。

モラロジーとの関連を考える時、デベンドロナトの道徳律を分析することは意味のあることである。次にこのデベンドロナトの作成したブランモ協会の道徳律を分析しよう。

2 ブランモ協会の道徳律

1) ダルマ

ヒンドゥー教の伝統に従って、デベンドロナトはダルマ (*dharma*) を人生の拠りどころと考えている。ヒンドゥー教におけるダルマ (*dharma*) という語はさまざまな意味をもっている。モニヤー・ウィリアムズ (Monier Williams) の *Sanskrit-English Dictionary* は以下のような意味をあげている。

- (1) 確立されたこと、確固とした不変の命令、法、規定。
- (2) 用法、慣習、慣行、規定された行為、義務、正義 (しばしば罰と同じ意味で用いられる)。
- (3) 徳、道徳、宗教、宗教的美点、よい仕事。

デベンドロナトはダルマを不変の法と考え、倫理の基礎にあるものとして考えている。それゆえ「ダルマは死に及んでも我々の友であり、我々に伴う。他のすべては肉体とともに滅びる。」(第14章117) とか、「木や石ころのように友人たちは死体を地に捨てる。しかし、ダルマは見捨てない。」(第16章136) という句を掲げている。また、「父母、妻子、友人、親戚の者は来世において何の助けにもならない。ただ、ダルマのみがたのみである。」(第16章134) という句を示して、ダルマこそこの世においても来世においても人間の拠りどころとなる永遠の法であることを主張している。

2) 知恵 (*prajña*) と知識 (*vidyā*)

ダルマを拠りどころとして生きるためには、まずダルマを知らなければならない。そこで知恵 (*prajña*) という概念が出てくる。知恵を獲得した人はダルマに従って生きていく人でもある。それゆえ、「知恵の目を獲得した人は、もはやこの世で罪に巻き込まれない。彼は喜んで執着を捨て、ダルマを放棄しない。」(第14章114) とか、「知恵によって精神的痛みをとれ。薬によって肉体的痛みをとれ。最高の庇護者たる至高存在を悟って知恵を獲得した人は再び悲しむことはない。」(第10章81) と述べている。

究極の真理であるダルマを知る知恵はブラジュナ (*prajña*) と言われ、通常の知識と区別されている。デベンドロナトは、ブラジュナとともに通常の知識を意味するヴィディヤー (*vidyā*) も重視している。例えば「この世において知識がなく、文盲であれば、女はまちがいを犯し、男は欲望と怒りのとりこになる。」(第13章106) と述べている。また、学問、学識を尊重すべきことを次のような句を掲げて主張している。「人間は髪が白くなったからといって尊敬を受けない。若くても学識ある人は尊敬を受ける。」(第4章28)

3) 因果律

なぜ道徳を実行しなければならないかという根拠として、デベンドロナトは道徳実行には良い結果が得られ、悪い行為には悪い結果がもたらされるという因果律を説く。デベンドロナトの道徳律は全部で138の句より成っているが、その約6分の1にあたる22の句が道徳的因果律の思想を表している。

モラロジーとの関連で注目したいことは、精神作用の因果律についても述べていることである。『マヌ法典』第12章3の句「良い結果や悪い結果は、心、ことば、身体による3つの種類の行為によってもたらされる。それぞれの行為に応じて、良い、悪い、中間の段階がもたらされる。」を引いている。(第15章124)

また、因果律における自己責任性ということについて、同じく『マヌ法典』の第4章240「人は一人で生まれ、一人で死に、一人で善行の結果を味わい、悪行の結果に苦しむ」を掲げている。(第16章136) 自分の道徳実行の結果は自分が受け、自分の不道徳の結果もまた自分が受けるという自己責任性の原理がここには説かれている。モラロジーの「因果律は自分もち」という考えかたと共通している。

善因善果、悪因悪果を説くということにおいてはモラロジーと異なるところはない。例えば、「罪を犯したものは悪評を得、悪い結果に苦しむ。しかし、善行の結果は良い評判と恵みである。」(第14章121) とか、「不正は

つかの間の進歩、繁栄、勝利をもたらすかもしれないが、結局は完全に消滅する。」(第16章132)の句を掲げている。

モラロジーと異なる点は、この世における因果律だけでなく、来世における因果律を説いていることである。例えば、「賢くて、善い行いをし、よい人格をもち、満足し、神を知るものは、この世で名誉を得、来世でよい場所を得る。」(第4章36)と述べている。ここには、インドの伝統的な靈魂不滅の考え方に基づいて、死後も魂が存続し、この世での行為の結果を来世で味わうという思想が述べられている。

4) 運命の正受

モラロジーの格言、「自ら運命の責めを負うて感謝す」は、逆境にあっても感謝の心で運命を立てかえていくという道徳的責任の自覚を述べたものである。同様の精神をデベンドロナトも次のような句で述べている。「喜ばしいことがあっても大得意にならず、不幸なことがあっても悲嘆にくれるな。富を失っても失望せず、ダルマを放棄してはならない。」(第5章47)「何が起ころうとも、幸福であれ、不幸であれ、喜びであれ、不快であれ、それを不屈の精神で受け入れよ。」(第5章46)

5) 家族倫理

家族倫理について、デベンドロナトは多くの句を掲げて述べている。伝統的なヒンドゥー教が天国への到達や現象世界を幻と見ることを強調して、いわば世俗外的倫理に傾きがちであったのに対して、デベンドロナトは家庭内での道徳を重視し、世俗内的倫理を提唱したのである。

(1) 夫婦間の道徳

当時、西洋の自由思想などの影響によって、女性解放運動が盛んになりつつあった。しかし、夫婦間の道徳を説く場合において、デベンドロナトは従来のヒンドゥー教の男性中心主義的な考え方に従っていることがわかる。妻は夫のことに従って行動しなければならず、それが妻の最高の義務だと

言う。(第2章19) また、妻は不必要なことを話さず、宗教と世俗の事において邪魔になってはいけない(第2章17)と述べている。また、男女隔離の原則(バルダー)をデベンドロナトは支持している。例えば、『マヌ法典』第9章5の「妻たちはいかなる邪悪な仲間からも注意深く守られなければならない。なぜなら、もし、よく監護されなければ、彼女たちは夫と父親の両方の家族に悲しみをもたらすからである。」(第2章20)という句を引いている。

このように男性上位の道徳観をもったデベンドロナトではあるが、夫婦の相互の信頼と誠実さの大切なことをも強調している。妻は尊重され、かわいがられなければならないと述べ(第2章10)、「夫が妻を喜ばし、妻が夫を喜ばせる家庭には永遠の幸せがある」(第2章14)という句を掲げている。

(2) 家長の務め

家長の務めとして次のように言う。「家長は妻を世話し、息子たちを教育し、親せきの人たちを保護しなければならない。これはつねに彼の義務である。」(第3章23) また、家長の娘に対する義務は次のようである。「娘も[息子と]同様に世話をし、教育を受けさせ、宝石と適当な金品の贈り物をもった男と結婚させなければならない。」(第3章24)しかし、父親は欲心から娘と引き換えに金品などの贈り物を受けとってはならない。(第3章27)あくまで娘の幸せのために贈り物が役に立てられなければならないのである。

(3) 親孝行

親を尊重し、世話をするということが子供の側の義務として説かれている。「家庭にある人は父母を目に見える神々とみなして可能な限りの世話をしなければならない。」(第1章3) また、良い息子はつねに両親に対して穏やかに話し、両親の喜ぶことを行ない、両親の命令に従う、と述べている。(第1章4) 父母は最も尊敬すべきであり、父母から受けた恩は返すことができないほど大きいことを説いている。(第1章6)

6) 仕事と道徳

世俗内的道徳を重んじるデベンドロナトは仕事の重要さを認めている。勤勉に働くことによって富をえることを奨励している。例えば、「もしあなたが金持ちでないとしても、自分を軽べつしてはならない。死の日まで富を得ることに努めよ。富の獲得を難しいことだと考えるな。」(第4章30) また、正しい方法でお金を得ることはダルマにかなっていると述べている。(第9章75) 仕事は義務であるとともに、自己を生かすものでもある。それゆえ、「自己充実感をもたらすことを注意深く行なえ、そして、その反対のことを避けよ。」(第12章99) と述べている。

7) 利己心の滅却

モラロジーに自我没却の原理があるように、利己心を取り去ることは道徳の要諦である。デベンドロナトも利己心をなくすことをくり返し説いている。次の句はその典型的なものである。「自己によって統御された自己は自己の最良の友である。自己は最良の友にもなりうるし、最大の敵にもなりうる。」(第4章38) 自己を統御するとは自己の利己心を統御することであるが、自己の利己心を統御するにあたって重要なことは自己の感覚を統御することである。感覚的なことのみにはふけると、利己心を引き出す結果となる。そこで、デベンドロナトは「もし人間の心が勝手気ままな感覚に従うならば、船が嵐に沈められるように人間の理性は破壊されてしまう。」(第13章102) と述べ、「多くの感覚のうち、もしひとつの感覚が統御されなければ、そのみで人は理性を失ってしまう。」(第13章104) と警告している。

また、精神作用、ことば使い、行動の三つについて自己を統御する必要を説いている。すなわち、「心、ことば、身体を統御し、すべての生物のために、欲望、怒りを抑制することによって、人は人生の目標を達成する。」(第15章128) という句を掲げている。モラロジーの身口意一致という考え方や精神作用の重視と共通している点に注目したい。

利己心の現れとして物欲があげられるが、デベンドロナトは、「他の人の

妻を母のごとく、他の人の物を石ころのごとく、すべての生命を自分自身のごとく見る人は正しく見る人である。」という句を引き、物欲を抑制すべきことを教えている。(第12章95)

また、欲望の際限のないことを、「欲望は望みのものを享受しても決して満たされない。むしろ、ギー [食用油の一種] をそそがれた火のように、いっそう燃え上る。」(第13章103) という句によって表明している。そして、足るを知ることの必要性を次のように述べている。「幸せになりたい人は、足るを知り、自己を抑制しなさい。足るを知ることこそ幸せの根本であり、その反対の足るを知らないことは不幸の源である。」(第5章42)

8) 慈悲の実践

利己心を制御することはモラロジーの自我没却にあたることである。モラロジーでは自我没却をして慈悲を実現していくことが肝要とされるが、デベンドロナトも慈悲の精神をもって他の人に接することの重要さを説いている。慈悲の実践として慈善や施与を強調している。例えば、次のような句を掲げている。「[飢えている人に] できうる限り食物を与えなさい。忍耐強く、つねに宗教的義務を行ないなさい。すべての人に適切な世話と思いやりで接しなさい。」(第9章76) また、「物質を獲得し、他の人に自分の得たものを分かち寛大な人は幸福になり、害をまぬがれる。」(第9章71) という句を引いている。さらに、「病人にはベッドが、疲れた人には椅子が、のどの渇いている人には飲み物が、飢えている人には食物が与えられるべきである。」(第9章77) とも述べている。

慈悲の心は他の人を自分自身のようにみなす心である。それゆえ、次のような句を掲げている。「善を望むものは他の人を自分自身のようにみなすべきである。なぜなら、悲しみも、幸せも、すべての人に等しく感じられるものだからである。」(第12章94) 他人を自分自身のようにみなす精神から他を許す寛容の精神が生まれてくる。寛容の精神についてデベンドロナトは次のように言う。「許しによって人は統御される。寛容は最高の徳である。それ

は弱者にとっては恵みであり、強者にとっては飾りである。」(第12章93)

他人を自分と同じようにみなす精神は、また非暴力の精神とも関係している。非暴力を主張する次の句を彼は掲げている。「行為とことばと思いによって生きとし生けるものに害を与えない時、人は神に到達する。」(第14章103)

9) 謙虚さ (*vinaya*)

デベンドロナトは謙虚な心をもつことの重要性を、次の句を引いて説いている。「多くの王は馬や馬車をもっている、謙虚さをもたないために滅亡し、森に住む人〔修行僧〕は謙虚さによって王国を得た。」(第12章98) 謙虚な人は他の人の忠告を素直に聞くことができる。しかし、「不愉快だが有益な話しをする人、また聞く人は少ない。」(第6章58)

10) ことばによる善行

ことばによる道徳実行についてデベンドロナトがどのように述べているかを見ていこう。

(1) 正直と黙秘の徳

うそを言わないこと、真実を語ること、すなわち正直の徳を彼は強調している。「見たり聞いたりすることによって、人は目撃者となる。もし目撃者が真実を語れば、ダルマとアルタ (*artha*, 富) を失わない。」(第7章59) しかし、一方で黙秘の徳の必要なことも忘れていない。すなわち、正しい人は秘密にするようにと言われたことを公にしない、と述べている。(第6章49)

(2) 中傷の戒め

他人を中傷することをデベンドロナトは次のように戒めている。「人は他人の過酷なことばに耐えなければならぬ。また、他人を中傷してはならない。そして、誰に対しても敵対的にふるまってはならない。」(第1章8) 悪人は他の人を責める時に喜びを感じるが、善人は痛みを感じるものである、

と述べている。(第12章96)

11) 報恩

報恩の心をもつことの大切さを次のように述べている。「恩知らずの人に名声、地位、幸福はない。恩知らずの人は尊敬に値しない。彼らは仕返しを避けることはできない。」(第8章70)

結び

本稿の第1章は、筆者がインド西ベンガル州にあるロビンドロナト・タゴール創立のヴィシュヴァ・バラティ大学へ提出した博士論文の一部を成すものである。筆者は1981年より1984年までの3年間のインド留学期間中、ラムモーハン・ローイやデベンドロナト・タゴールなどに代表される近代インド思想、特に19世紀のベンガルにおけるインド知識人の思想に関心を持ち、研究してきた。結びにかえて、モラロジーとの関連における近代インド思想研究の意義と展望について述べてみたい。

19世紀のベンガルは、イギリスの植民地政策が進む中で、あらゆる方面に新生のエネルギーが満ち溢れたベンガル・ルネッサンスと呼ばれる時代であった。我妻和男はその特徴を次のようにまとめている。

- (1) 中世文化のみでなく、リグ・ヴェーダ、ウパニシャッド、などの古代文化の尊重
- (2) 文化の停滞的・形式的・因習的状態の打破
- (3) 土着のベンガル文化の尊重
- (4) 西洋外来文化との折衝・交流とその影響
- (5) いわば、ルネッサンス人として、個人の全人的発展への努力
- (6) ベンガル民族主義およびインド民族主義意識の昂揚
- (7) ベンガルの宗教改革、政治・経済改革、社会生活改革との密接な関係

ここにあげられた西洋外来文化との折衝・交流とその影響や、ベンガル民

族主義およびインド民族主義意識の昂揚などの点において、明治時代の日本との比較は興味深いものである。モラロジーは、西洋文化が押し寄せて入ってきた明治時代に学者としての地歩を築いた広池千九郎によって樹立されたものである。モラロジーもしくは広池千九郎における東洋的な価値観と西洋的な価値観の融合あるいは対決は、近代インドの精神的指導者たちの場合とどのように違っているのか、という観点からのアプローチも有意義であろう。

興味深いことに、近代インドのヒンドゥー教改革者たちは道徳と宗教、宗教と科学の統合をめざそうとしたのである。また、世界の諸宗教を比較し、究極的には一つの真理であることを主張したのも彼らであった。ラームモハン、デベンドロナトの他にケショブチョンドロ・セン、ラーマクリシュナ、ヴィヴェーカーナンダなどの名がこのことに関連してあげられる。彼らの思想は同じ東洋といっても、日本や中国とは異なるインド思想の伝統の中から出てきたものである。モラロジーは主として日本と中国の思想から大きな影響を受けている。この点において近代インド思想の研究はモラロジーに新しい展望を与えてくれるであろう。

注

- (1) Devendranath Tagore, *Ātma-jibani*, (『自伝』) 3rd ed. by Satīścandra Cakrabartī (Calcutta: Viśva-bhāratī Granthālaya, 1927), p. 49.
- (2) *Ibid.*
- (3) *Ibid.* pp. 51-52.
- (4) *Ibid.* p. 52.
- (5) 『イーシャ・ウパニシャッド』第一章第一節、訳は Radhakrishnan, *The Principal Upaniṣads* (London: George Allen and Unwin LTD, 1953), p. 567によった。
- (6) Sivanath Sastri, *History of the Brahma Samaj*, 2nd ed. (Calcutta: Sadharan Brahma Samaj, 1974), p. 56.

- (7) *Ātma-jibani*, p. 69.
- (8) Nemai Sadhan Bose, *Indian Awakening and Bengal*, 3rd ed., (Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay, 1976) p. 144.
- (9) *Ātma-jibani*, p. 77.
- (10) *Ibid.*, pp. 75-77.
- (11) ガーヤトリー・マントラとは『リグ・ヴェーダ』III, 62, 10の詩句よりとられた、太陽の機能の一面を代表し、万物を刺激し、激励し、金色に輝く神であるサヴィトリへの祈りの句である。次のような意味をもっている。「サヴィトリ神の栄光をあげよう。願わくば彼が私を解脱に導きたまわんことを。」
- (12) *Ibid.*, pp. 84-85.
- (13) *Ibid.*, p. 86.
- (14) *Ātma-jibani*, "pariśiṣṭa" (付録), pp. 366-367.
- (15) *Ibid.*, p. 367.
- (16) *Ibid.*, pp. 365-366.
- (17) *Ātma-jibani*, pp. 88-94.
- (18) *Ātma-jibani*, p. 99.
- (19) *Ibid.*, p. 102.
- (20) *Ibid.*, p. 107.
- (21) *Ibid.*, p. 166.
- (22) *Ibid.*, 75.
- (23) *Ātma-jibani*, p. 172.
- (24) *Ibid.*, p. 173.
- (25) *Ibid.*, p. 167.
- (26) *Ibid.*, 143.
- (27) *Ibid.*, p. 215.
- (28) Kṣitindranath Tagore, "Brāhma Dharma Bijer Abhivyākti", *Tattvabodhini Patrikā*, 1839ṣak (1917) Jyaiṣṭha 月, pp. 26-27.
- (29) *Ātma-jibani*, p. 176.
- (30) *Brāhma Dharma*, 10th ed., (Calcutta: Sadharan Brahma Samaj, 1975) p. 118
この句の意味は次のとおりである。「輝きわたる不滅の方、すなわち、この無限

の空とこの魂に住し、全知なる方を知った知者のみが死に打ち勝つ—それ以外に
解脱に至る道はない。」

㊦) *Ātma-jīvanī*, p. 180.

㊧) Keiji Takeuchi, "A Study in Brahmo Theology with the Special Reference to
Rammohun Roy and Devendranath Tagore", Diss. Visva-Bharati 1984, pp.
110-132.

㊨) 我妻和男『タゴール』(人類の知的遺産 61) 講談社、昭和56年、p. 35。

A Study of Devendranath Tagore

Keiji Takeuchi

This paper discusses on the ideas of Devendranath Tagore (1817~1905). He is the father of the great poet Rabindranath Tagore, who received a Nobel prize for literature for the first time in Asia. This paper consists of two chapters. In the first chapter, I trace the formation of his religious ideas as elaborated in his autobiography, *Ātma-jīvanī*. In the second chapter, I analyse the moral code of Brahmo Samaj which was formulated by him.

He was the religious successor of Rammohun Roy (1774~1833), the founder of Brahmo Samaj. He assimilated much Western knowledge, but essentially he followed the spiritual tradition of India. His religious ideas were expressed in the sacred book of Brahmo Samaj, the *Brāhma Dharma*.

He was not a mystical hermit who did not care for social life. He knew the importance of morality in life, and formulated the moral code of Brahmo Samaj in the second part of the *Brāhma Dharma*. We can find points of similarity between his moral code and the ideas of morality.

In conclusion, I refer to the significance and perspective of the study of modern Indian thought in relation to morality.

Contents of my paper are as follows:—

Introduction

I. The Formation of the Ideas of Devendranath Tagore

1. Religious Awakening and Pursuit of Truth
2. Establishment of *Tattvabodhinī Sabhā*
3. To Become a Member of Brahmo Samaj
4. Deepening of His Religious Life
5. The Problem of Infallibility of the Vedas
6. The Foundation of Brahmo Religion
7. Making of the Sacred Book of Brahmo Samaj

II. The Moral Code of Brahmo Samaj

1. *Dharma*
2. Knowledge (*prajñā*) and Wisdom (*vidyā*)
3. The Law of Moral Causality
4. Acceptance of Fate
5. Family Ethics
 - (1) Morality of Husband and Wife
 - (2) Duty of Householder
 - (3) Filial Piety
6. Work and Morality
7. Renouncement of Selfishness
8. Practice of Benevolence
9. Modesty (*vinaya*)
10. Practice of Morality in Words
 - (1) Virtue of Honesty and Keeping a Secret
 - (2) Prohibition of Words of Abuse
11. Repayment of Obligation

Conclusion

Notes